女商一代 Ⅱ

挑戦編

花登 筐

一代 Ⅱ
挑戦編

花登筐

女商一代 ⑪ 挑戦編　880円

昭和55年3月10日　第1版第1刷発行

著者　花　登　筐
発行人　真　野　金　蔵
発行所　スポーニチ出版
（スポーツニッポン新聞社出版局）

〒100 東京都千代田区一ツ橋 1—1—1
電話 (03) 214—1700

印刷　東京ベル印刷
製本　大口製本印刷

© K. Hanato 1980

0093—1692—3718

女商一代 Ⅱ

挑戦編

裝幀

成瀬

数富

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一厘飴

「ここだす」
孝助が指さしたのは、ほき屋とは目と鼻の先にある生国魂神社の傍であった。
辰吉の家は、あの天王寺の職人の家とは違ってまだしもましであったのは、やはり腕のよいせいであろうか。
しかし、所詮、路地の長屋は長屋であり、部屋が一部屋多いくらいであった。
「これは番頭さん、いつもお世話さんだす」
ここでも女房がぺこぺこ頭を下げた。
ところが奥の間で仕事をしている辰吉は無口であった。
「あんさん、甘味屋の番頭さんがお客さん連れて来はりましたで」
女房からそう聞いても、辰吉はちらっと見るだけで頭も下げずに手を動かしていた。
「すんまへん、挨拶の一つも出来まへんので。何しこのわてと喋るのも一日一言か二言でして」
亭主の無口の分、女房がよく喋ったが、ほきはそんな辰吉の手許をじっと見つめていた。
辰吉は鋏を持って飴を切っていた。
丸い固めた飴があっという間に兎になって行く。見事な飴細工であった。
ほきがうっとりと見ていると辰吉は作った飴をほきに差し出した。

「くれはるんですか？」
ほきが聞くと女房が慌てて、
「いえ、見せてるだけだす。それでのうても甘味屋はんの注文間に合いまへんのに……。あんさんそうだすやろ」
辰吉は女房を無視してほきに、
「やる」
と告げた。
「あんさん、売り物やのに何てことを……。まるで儲かってるみたいに番頭はん思わはりますやないか」
ここでまた甘味屋の思惑を気にする職人の家族の姿があった。
「儲かってるみたいて、あんたとこ儲かってるんと違うか？」
孝助が冷たい声を出した。
「何言うてはります番頭はん。うちの人、飴一体幾つ一日で作ります。それでのうても気に入らんかったらごろりと寝てしもたり、生国魂はんへぶらぶら歩いて行ったりして、仕事なんかしまへんのや。喰べるだけ入ったら御の字で……。そやろ、あんさん」
すると辰吉は立ち上がって出て行った。
「また、あんさん、仕事放ったらかしてどこへ行く……」
それから、さんざん愚痴を言い出す女房の前から立ち上がったほきは、
「番頭はん、帰りまひょか」
と促していた。

「用事はええんだすか？」
「へえ。もう結構だす」
「お帰りで？」
女房はじろりとほきの手の兎の飴を見て、
「あのすんまへんけど、その飴……」
と言った途端にほきは舐めていた。
「ああ、おいしい飴やこと」
女房が、ぐいと睨んだのは、かなり勘定のこまかい女であろう。
表へ出ると、路地で子供がこまを廻して遊んでいた。
それをじっと見ている辰吉の姿があった。
「辰さん、嫁はんが怒ってるで」
孝助が声をかけると、二つのこまを指さして、
「どっちが勝つか賭けんか……」
と言い出した。
「阿呆らし。子供やあるまいし」
孝助とほきは路地を出た。
「お嬢はん、辰吉に見本頼みはらへんので？」
「へえ。何や変わった人やさかい、頼みにくうて」
「そうでっか……」
それでも孝助はほっとしたようだったが、

「どこでも職人は変わりもんでな。その分、嫁はんがしっかりしていて、ここのは特別やけど、まああの女房にかかったら……」
それ以上は聞かず、ほきはそこで孝助と別れた。
孝助が辰吉の家へ案内したことを内緒にしておいてくれと念を押さなかったのは、保証をほきに約束させたからであろう。
ほきはそれから店へ戻ったが、吉松が七厘の売上金を出した。
「ご苦労はんでした。もうお帰り」
「いえ、若旦那さんからここで泊まるように言われてます」
「泊まってほしいけど、ここは一間しかないし、私は女、あんたは男、一緒に寝るわけにはいかへんやろ」
吉松がくすぐったそうな顔をしたのは、大人の男と見て貰ったからであろう。
「そやから帰って明日の朝早う来て」
「わかりました」
まだ丁稚だから、清次郎の命令通りにせぬことの恐ろしさを知らぬのであろうが、しかし、その理由ならば清次郎も怒れまいと思った。
吉松を泊めるのならいくらでも方法があるのだが、泊まられるとほきは困ることがあるのは、今夜、さよが来ることになっていたからである。
ほきはめし屋から運んで来た夕食を食べながら、吉松が売った金を見た。
昼が五厘、午後が七厘、合計一銭二厘が一日の売上げである。
これではどう考えても一ヵ月二円の家賃をさえ払えない。

ほきは、清次郎や孝助が二つ井戸の表通りに店を出したことで素人と笑った理由が初めて飲み込めたが、ほきは痛痒はなかった。
夕食をすませるとさよがやって来て、また同じように、
「こんなところで駄菓子屋なんか出して、ほんまにええのんか……」
と、また心配したのは、この界隈を見てのことらしい。
「お父さんかて、まかしておけと言わはりましたやろ」
とほきは取り合わず、真剣な顔をして、
「なあ、お義母さん、お願いがあるんですけど」
「何や？」
「お義母さんはこの店へ顔を出さんでほしいの」
「何やて……」
さよは鼻白んだ。
「わては商売は別に邪魔せえへんし、ただお父さんが心配してはるさかい見に来ただけや」
「そやから、用がある時だけこっちから行く」
「何でやの？　ほきちゃん」
「お願いやから聞いて」
「そうか……。わかった」
さよが決してわかっていないことは、ほきも知っていた。
「そんなら明日から政吉を来させる」
「あの子も暫く待ってほしいの」

「何でや？」
「丁稚が問屋から来てくれるんや」
「ほきちゃん」
さよは本当に怒ったらしい。
「わてはな、あんたが儲けを分けると言うても、もらうつもりで居てへんで」
どうやら、さよは売上げを知られることをほきが困ってのことと考えたらしかった。
ほきもどう答えてよいものか困ったが、
「お義母さん、ここは人通りの多いところや。お義母さんが米政のお嫁さんやったことを知ってる人もあるんやろ。もしお義母さんが出入りしていて、この私との繋がりが知られたら、どうなるの？それこそ私の目的は果たせんやないの」
ときめつけた。
「そういうことか。けど、まだあんた作州屋と別に戦うてはいんやないか」
「お義母さん、大阪で店を出した時から戦は始まっているんや。それわかっててもらわんと……」
「そういうことか」
初めてさよにはわかったらしい。
「その代わり、お義母さんに手伝うてもらいたいことがあるんやけど」
「何や？　言うて」
「さくらを頼みたいの」
「さくらならまかしとき」
ようやく、さよも機嫌を直してきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「それもお義母さんと違うの。お義母さんが指図して他の人に来させてほしいの」
「何をやるのや？」
「この私を金持ちの家の娘に見せてほしいの」
ほきは高利貸しの娘で、その高利貸しが病気でと説明した。聞き終わったさよはまた、
「ほきちゃん、一体何の為にそんなことをするの？」
と聞いた。
「それも聞かんといて。ただ商売を流行らせる為にだけと思うといて」
「わかった。けど、あんた何ぞ隠してることあるんやないか？」
さよは察していた。
「いずれ、その内話すさかい」
「そうか……」
さよは立ち上がった。
「お父さんを頼みます」
「ああ、夫婦やもん」
さよが帰って行くと、ほきはほっとした。
これで心配もなく清次郎と対することが出来るからである。
翌朝、大戸を開くと吉松が立っていた。
「昨夕帰ったら若旦那さんにひどう怒られまして、朝一番にここへ行けて」
「そんで？　ここへ来たんか？」
さよの姿を見られたのではないかとぎくりとしたが、

「いえ。兄ちゃんが船場で奉公してますんで、そこで内緒で泊めてもらいました」
「そうか。そら悪いことしたな。今晩からは何ぞ考えるわ」
ほきは吉松と朝食をすますと、
「ちょっと出て来るさかい」
と言って、吉松から、
「店始めはって店に居はったことないんですな」
と妙な眼で見られた。
「あんたが居てくれはるやろ。私はいろんな店を見に歩いて勉強するんや」
ほきは店を出ると生国魂神社の境内に行った。
昨日、辰吉がここへぶらぶら歩きに来ると女房が言っていたことを聞いていたからである。
案の定、二時間は待ったろうか、辰吉が歩いて来た。
何を考えているのか懐手をして、いかにも面白くないと言った様子であった。
「あ、昨日は……」
ほきが近付くと辰吉はちらっと見て昨日のことなんか忘れたかのように通り過ぎようとした。
「昨日の尻尾の飴おいしかったわ」
「尻尾の飴？」
辰吉は振り返ってじろりと睨んで、
「あら兎やぞ」
「そうかて尻尾並の値段では兎にはなってまへんやろ」
すると辰吉は少し考えていたが、

「それもそや」
とうなずいて行こうとした。
「なあ、辰吉さん。兎が兎で通るようなこともしはらしまへんか？」
「どんなことや？」
「ただ当たり前のことだす。あんさんの作らはった細工飴があんさんの考えはる値段で売れるように……」
「どこが買う？」
「この私が」
それを聞くと辰吉は、もうほきに背を向けて足早に歩き出した。
それを追い縋りながら、
「辰吉さん、賭けはきらいですのか？」
と聞いていた。
「賭けやと？」
辰吉はそこで足を停めた。
「そうです。賭けが好きやったら賭けてみはらしませんか？」
「何に賭ける？」
「この私にです」
辰吉は怪訝そうにほきを見た。
「おまはんに？　おまはんの何に賭ける？」
「私の言う通りに黙ってお菓子作ってみはなはるてことにだす」

「その菓子は甘味屋の仕事け？」
「違います」
「そんなら出来ん」
「そやから、賭けてみはらんか言うてるんです。その代わり、賭けに勝たはったら、ようなりますで……」
　辰吉はちょっと考えて、
「どんな菓子を作る？」
　と聞いていた。
「賭けはりますか？　そんなら話しますけど」
　すると、辰吉はじろりと見て、
「わし一人に賭けさせるんけ？」
「この私にも賭けえて？」
「ほや。わしが乗るか乗らんか賭けてみいや」
「成程、一人で賭けは出来まへんな」
　ほきは笑ったが、すぐに真剣な目付きになって、帯の間から財布を取り出して一厘銅貨を掌の上に置いて見せた。
「これだす」
「何やそれ？」
「これと同じ形の飴作ってもらうんです」
「銭の飴を？」

「はい。どうだす？」
「他のやつに言え」
　辰吉は興味なさそうであった。
「気に入りまへんか？」
「そんな飴なら誰でも作りよる」
「そうですやろか。まあ見とくれやす」
　ほきが出した一厘銅貨は二枚重ねてあった。
「二枚？」
「そうです。それからこれを見とくれやす」
　重ねた二枚を開いて見せると小さな紙が入っていた。
「そら何や？」
「ただの白い紙です」
「そら何のまじないや」
「こっちのを見とくれやす」
　ほきは今一度財布の中から一厘貨を出すと、それも二枚重ねてあってやはり間に紙が入っていた。
「見とくれやす」
　辰吉は手にとって目に近付けると、
「二十円……」
　と読みあげた。
「そうだす。二枚重ねた一厘飴を三十個で一組にして、その二十円の紙を一個だけ、それに五円を

二個、一円を三個入れてもらうんです」
「後は？」
「白紙です」
「そら、どういうこっちゃ？」
「はい。二十円という紙が入ってたら二十円金貨の飴を渡すんです。そして五円、一円も同じです」
「すると富くじみたいなもんか？」
「そういうことです。子供の賭けです」
辰吉の眼が輝いた。
「どうです？　この二枚重ねて中の紙が見えんような一厘飴と、二十円金貨に五円金貨、一円銀貨の飴作れるて辰吉さんしか居てはらんと違いますやろか？」
「そういうことけ……」
じっと見ていた辰吉は、
「おもろそうやな」
と呟いた。
それを見てほきは、
「賭けてくれはりますか？」
と乗り出したが、辰吉はそれには答えず、
「一体、これ何ぼで売る？」
「一厘を二枚重ねてるさかい二厘です」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.